

水辺を描く一湖・川・海・港一

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質
湖の風景				
1	白瀧幾之助	湖畔(尾瀬沼)	1932頃	油彩・布
2	和田三造	芦ノ湖風景	不詳	油彩・布
3	金山平三	榛名湖	不詳	油彩・布
4	川西 英	湖畔雪景	1942	木版・紙
5	濱田 観	湖底	1974	紙本着色(額装)
川の風景				
6	福田眉仙	安瀾橋図巻(『支那三十図巻』より)	1917-19	紙本墨画淡彩(卷子)
7	白瀧幾之助	テームス議事堂	1923頃	水彩、鉛筆・紙
8	大野麥風	播州西脇風景	不詳	紙本墨画(色紙)
海の風景				
9	関根正二	海(銚子)	1916	油彩・布
10	松岡映丘	巖島詣	1919	絹本着色(軸装)
11	森崎伯霊	五月の晴	1957頃	紙本着色(額装)
12	榎倉省吾	岬	1964	油彩・布
13	鈴木亜夫	能登の寒冷前線	1965	油彩・布
14	川西祐三郎	新舞子干潟	1978	木版・紙
15	上野長雄	月夜の浜辺	不詳	木版・紙
港と船のある風景				
16	橋本関雪	南国	1914	絹本着色(六曲一双屏風)
17	林 重義	漁港	1933-34	リトグラフ・紙
18	梶 一郎	神戸港夕照	1964	油彩・布
19	尾田 龍	波止場	1986	油彩・布

本展要旨

水辺は、風景画の重要な要素としてしばしば描かれてきました。海に面した水辺では、穏やかな瀬戸内海や波の荒ぶる日本海など、さまざまな表情をもった海を見ることができ、内陸の湖や川の水辺でも、場所や季節、天候など諸条件により豊かな変化があります。また水辺は人々の暮らしを支え、その営みの場としての機能を果たしてきました。船が行き交い、工場などが立ち並ぶ港は、その代表でしょう。

本展は、館蔵の近現代日本絵画の中から水辺をテーマとした風景画に着目し、「湖」「川」「海」「港」の4つのセクションにより紹介します。ひとくちに水辺といっても描かれた舞台や技法材質(油彩画・日本画・版画・水彩画)はもちろん、作家それぞれの表現によって大きく異なる多彩な作品世界をお楽しみ下さい。

各章解説

湖の風景

湖とは、海と接しておらず四方を陸に囲まれた水域です。波のない湖面は時に鏡面のような様相を呈し、静謐で神秘的な光景をもたらします。

金山平三の描いた榛名湖は群馬県、白瀧幾之助の尾瀬沼は福島県、和田三造の芦ノ湖は神奈川県に位置します。3人の作家はいずれも明治期の東京美術学校西洋画科を出ていますが、グレートーンを基調に切れの良い筆致を見せる金山、

官展の主要作家としてアカデミックな写実を貫いた白瀧、色彩やデザインの分野でも活動し絵画作品にもその要素が現れている和田と、三者三葉の個性が見て取れます。他方、川西英は湖を望む里山の静かな雪景色を木版ならではの素朴な風合いとシンプルな色調でとらえます。そして濱田観が描くのは、湖を望む風景ではなく岩陰に魚の潜む、深い青色をたたえた湖底です。それぞれに焦点の当て方は異なれど、清々しい湖の風景をご覧ください。

川の風景

雨や雪となって降ったり、地下から湧き出したり地表に溜まった水は、高地から低地へ流れ、やがて川となります。世界の古代文明が大河に沿って生まれたように、川を起点に人々は暮らしを営み、集落や都市が発展していきました。ここでは国内外の川の風景を見てみましょう。

福田眉仙《安瀾橋図巻》に描かれた安瀾橋は、中国四川省に現在も実在する橋です。橋の長さからして川幅がかなり大きく、川岸に沿って楼閣のような建物が点在しています。白瀧幾之助《テムズ議事堂》では、テムズ川から望んだビッグベン（国会議事堂）という英国を象徴する風景が切り取られています。他方、大野麥風《播州西脇風景》に登場するのは加古川水系と思われます。播州地方ののどかな川のほとりが表現されています。

海の風景

西洋において海は「海景画」として、風景画から独立し一つのジャンルをなす主要なテーマでした。海に囲まれた島国・日本においては、雄大な太平洋、波の荒ぶる日本海、そして穏やかな内海・瀬戸内海といった諸相を、作家たちは油彩画・日本画・木版画など異なる技法と切り口によって時に繊細に、時にダイナミックにとらえてきました。

関根正二の作品は、近代以降の日本で見られるようになる西洋的な海景画の一例と言えます。上野長雄は貝殻やヒトデなど海を象徴するモチーフを、ポップでデザイン的な木版画に表現しています。松岡映丘・森崎伯靈・川西祐三郎の各作品は、材質技法から色彩・構図までバラエティに富んでいますが、いずれも瀬戸内地域の穏やかな海を舞台としています。反対に鈴木垂夫が描く海は北陸・能登から望む荒々しい日本海です。榎倉省吾が描くのも白波立つ外海のように、海そのものよりも横縞状に層をなす岬の断崖絶壁がクローズアップされています。

港と船のある風景

ここでは、人工的に整備されて船が行き交い人々の営みの場となっている水辺一すなわち港のある風景を紹介します。海の玄関口である港は、人や物が集まる交通・物流の要衝であり、労働の場でもあります。船や工場の建物など無機的な構造物に焦点を当てた港風景もあれば、そこに集い働く人々の活気が伝わってくる港風景もあります。

梶一郎は夕日に照らされオレンジ色に染まった神戸港、尾田龍は青空の下たくさんの漁船が係留された波止場を描いています。林重義は陸揚げされた漁船と共に、労働にいそむ漁師たちをモノクロの力強い描線にとらえています。橋本関雪は、中国の南方を旅した際に目にした色とりどりの帆船が行き交う光景を、金箔や意匠的な波模様を用いて絢爛豪華な大画面に収めています。いずれの作品にも船が、海や港に生きる人々にとって欠かせない重要なモチーフとして登場しています。

作品解説（※リスト No.順）

白瀧幾之助《湖畔（尾瀬沼）》

白瀧幾之助（1873～1960）は、現・朝来市生まれの洋画家。東京美術学校卒業後に滞欧し、ラファエル・コランに学ぶ。官展系作家として写実的で穏やかな色調を備えた作品を制作した。尾瀬沼は火山噴火で堰き止められたことでできた、日本で最も標高の高い湖である。銀灰色を帯びた落ち着いた色調で、森の中の湖畔の静謐さを表現している。

和田三造《芦ノ湖風景》

和田三造（1883～1967）は、現・朝来市生まれの洋画家。東京美術学校卒業後、滞欧を経て官展で活躍。母校の教授職も務めた。色彩の研究にも打ち込み、その業績は商業美術、工芸図案、カラー映画の色彩指導など幅広い分野に及ぶ。本作では山に囲まれた芦ノ湖の風景を、大らかな筆致でとらえている。湖面に用いられた青色が目には鮮やかである。

金山平三《榛名湖》

金山平三（1883～1964）は、神戸市生まれの洋画家。官展を舞台に活躍したが、後年は画壇との交渉を断ち孤高の道を進む。風景画を中心にグレーのトーンを基調とした、切れのよい独特の筆さばきを持つ洗練された画風を切り開いた。本作もまさにその例に当てはまるといえ、冬の曇天のもと静かにたたずむ湖を、統一感ある色調にまとめ上げている。

川西英《湖畔雪景》

川西英（1894～1965）は、神戸市生まれの木版画家。独学で「自画・自刻・自擦」の創作版画に取り組み、モダンな構図と色彩を用いて地元神戸をはじめとした各地の風景、サーカスや楽隊、芝居の舞台などを表現した。本作では、静まり返った雪の里山の風情を、木版ならではの限られた色数と素朴な描写でとらえている。

濱田観《湖底》

濱田観（1898～1985）は、姫路市生まれの日本画家。京都市立絵画専門学校を卒業後、一貫して官展を中心に活躍。主に花鳥画を得意とし、東洋的な幽玄味のある絵画世界を創出した。本作は日展出品作品で、立派な体躯をもった魚が岩影の合間を泳いでいる。湖底を満たす深い青色からは、水の冷たさが感じられるほどだ。

福田眉仙 《安瀾橋図巻『支那三十図巻』より》

福田眉仙（1875～1963）は、現・相生市生まれの日本画家。30代の3年間中国にわたって明清画や南宗画を研究、とりわけ石濤の影響を強く受ける。帰国後、中国滞在の成果を『支那三十図巻』として発表した。本作に描かれるのは四川省に現存する安瀾橋と、その下を流れる岷江（中国最大の河川・長江の支流の一つ）である。

白瀧幾之助《テームス議事堂》

白瀧は20代前半と50歳になる年の2度、ヨーロッパへ渡っている。本作は、壁画研究などを目的とした2度目の渡欧時の現地スケッチと推測され、テムズ川とビッグベンというロンドンの二大風物詩を描く。当館にはアッシジほかイタリア各地の風景を描いた同時期の作品も複数所蔵されている。

大野麥風《播州西脇風景》

大野麥風（1888～1976）は現・東京都生まれ。最初に洋画、のち日本画に転じる。1923年の関東大震災を機に移住し、西宮に居を構えた。多種多様な魚類を細密な多色刷りで表した木版画集『大日本魚類画集』でも知られる。本作では、墨色と洒脱な筆致で橋のある川べりの風景を描く。思い思いの格好をした点景人物の様子からも、のどかな風情が伝わってくる。

関根正二《海（銚子）》

関根正二（1899～1919）は、福島県生まれの洋画家。ほぼ独学で絵を学び、16歳で二科展初入選、19歳で同展樗牛賞を受賞。しかしこの頃より心身が衰弱し、20歳の若さで逝去した。本作は初入選の翌年、銚子海岸へ写生旅行に訪れた際描かれたものとされ、雨雲の到来を予告する灰色を帯びた空と飛沫をあげる白波は、関根の心象風景を象徴するようでもある。

松岡映丘《巖島詣》

松岡映丘（1881～1938）は、福崎町生まれの日本画家。東京美術学校を首席で卒業後、長年にわたり母校で教鞭を執る。有職故実の綿密な研究に基づいて従来の大和絵に近代的性格を付与し、「新興大和絵」を創造した。本作は、平安時代の貴族が安芸国巖島神社へ船で参詣する様子を描いたものである。

森崎伯霊《五月の晴》

森崎伯霊（1899～1992）は、姫路市生まれの日本画家。家業である農業のかたわら独学で絵を学び、院展へ出品を重ねた。その作品は郷土を題材にした牧歌的なものが多く、自然の中で働く農民の素朴な姿には作者の暖かなまなざしが感じられる。瀬戸内海に面した里山と、真っ黒に日焼けした農家の親子が登場する本作もまさにその作例の一つである。

榎倉省吾《岬》

榎倉省吾（1901～1977）は、現・小野市生まれの洋画家。ほぼ独学で絵を学び、戦前は二科会、戦後は行動美術協会の創設に参加し同会を舞台に活動した。一貫して風景画を多く描いたが、戦後以降は色が飛躍的に明るくなり、大胆な筆致と相まって躍動感あふれる画風を示した。海岸の切り立った崖の岩肌を主役とした本作でもその特質が発揮されている。

鈴木亜夫《能登の寒冷前線》

鈴木亜夫（1894-1984）は、大阪府生まれの洋画家。東京美術学校卒業後、二科会会友となるも脱会し、独立美術協会の創設に参加。鮮やかな色彩と激しく自由な筆致で、日本的油彩画を追求した。本作はタイトルの通り寒冷前線の近づく海岸を描いたものか、波立つ海に逆巻く雨雲、それらを逃げるように先を急ぐ人物の姿が見え、どこか不穏な空気が漂う。

川西祐三郎《新舞子干潟》

川西祐三郎（1923～2014）は、神戸市生まれの木版画家。父・川西英を師に木版画制作を始める。父の版画技法を継承しながらも、墨版を巧みに取り入れるなど独自の表現を試み、静穏な世界感を創り出した。本作に描かれるのは夕焼けのもと広がる、たつの市新舞子の海。赤・青・黒の色が効果的に配され、視覚効果を高めている。

上野長雄《月夜の浜辺》

上野長雄（1904～1974）は、現・姫路市生まれの木版画家。10代で神戸に移り住み、その後神戸市役所に勤務。勤務の傍ら絵画や木版画の制作に励み、戦後には日本版画協会会員として永年出品を続けた。本作は満月の夜の波打ち際を描いている。サザエやアワビ、ヒトデなどの海辺の生物が主役となり、ポップで愛らしい印象である。

橋本関雪《南国》

橋本関雪（1883～1945）は、神戸市生まれの日本画家。竹内栖鳳に師事し、一貫して官展で活躍。水墨による動物画を得意としたほか、教養に根ざし漢籍に材をとった格調高い作品を数多く残す。本作は、関雪の初の中国訪問翌年に発表されたもので、船の鮮やかな赤色と金色の帆が目を引く。絢爛な画面から、中国南部の港町の活気と喧騒が伝わってくるようだ。

林重義《漁港》

林重義（1896～1944）は、神戸市生まれ。最初に日本画、のち洋画に転じる。二科展へ出品を重ねるとともに渡仏し西欧文化を吸収。帰国後は官展でも活躍した。西洋近代の様々な傾向を学び、それを日本的に昇華した油彩作品を描いた。本作はリトグラフ作品であるが、単色の力強く堅実な描線で、漁港に陸揚げされた船とそこで働く人々を表現している。

梶一郎《神戸港夕照》

梶一郎（1910～1998）は、姫路市生まれの洋画家。戦前は高知・大阪・兵庫各地の師範学校、戦後は神戸大学で教鞭を執り、長年にわたり美術教育者として尽力。姫路城など郷土の風物を主なテーマに創作活動を続けた。本作では夕刻の神戸港を描く。夕日を反射し微妙な光の表情を見せる海面を、巧みな筆致でとらえている。

尾田龍《波止場》

尾田龍（1906～1992）は、現・姫路市生まれの洋画家。東京美術学校卒業後、美術教師を務めながら国画会展への出品を重ねる。アフリカやベルギーの風物を描いた作品でも知られるが、晩年は、瀬戸内海地方各地の港や海沿いの街並みを好んで描いた。本作では、海に突き出た突堤とひしめき合うように係留された多数の小型船がクローズアップされている。